

# ちがさきの石仏

石仏調査ニュース

第18号

### 発行

茅ヶ崎市教育委員会  
茅ヶ崎市文化資料館

### 編集協力

文化資料館と活動する会  
(民俗行事部会)

### 連絡先

〒253-0055  
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18  
TEL:0467-85-1733  
e-mail:shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp



## 柳島の観音霊場巡拝塔の

### 銘文あれこれ

金子 栄司

坂東

右 奉献西国百番観世音菩薩

秩父

正 天下泰平国土安全 (基礎に) 供養塔

(篆書体)

背 皆弘化三年(一八四六)□丙午

夏五月吉祥日

諸国拝行之満主

相州柳島邨

小川七郎右衛門建焉

馬入邨

石工春次郎



観音霊場巡拝塔の三面に刻まれた銘文である。兜巾頭の角柱塔である。善福寺門前を北方向、東海道の方へ向かう途中、東の方、右手に通じる丁字路がある。直進する道は上り坂でその先は小出川に架かる湖東橋である。その丁字路にたっているのが観音霊場巡拝塔である。この塔と銘文に関連する二三を記してみる。

その一。地元の方には取り立てていうことではないのだろうが、明治時代初期や関東大震災前の地図を見ると、善福寺門前の道は東海道の

つながる道で、丁字路の道は松尾村への重要な村道であったようだ。

また、柳島湊に上陸した大山詣の人々は二つの道順で大山を目指した。下町屋〜今宿〜萩園〜田畑〜一之宮〜田村の渡。下町屋からは別名八王子道といわれる道。もう一つ、松尾〜浜之郷〜西久保〜大曲〜中瀬〜一之宮〜田村の渡。西久保では元宝生寺山門前、さらに日吉神社前から大曲で田村通り大山道に通じた。日吉神社境内には、この順路にあったといわれる「右大山道」と読み取れる石塔が置かれている。善福寺門前を北上する道や南東角の救世地藏尊前から松尾村に通じる道は大山道(相模大山街道)『大山阿夫利神社・目黒修一』でもあった。

その二。小川七郎右衛門は、善福寺南東角に建っている救世地藏尊(通称「おうめ地藏」と呼ばれているらしい。救世地藏尊に小川七郎右衛門妻「う免(うめ)」の名があるので、この方の善行から通称になったのではなからうか)の発願主の一人で小川七郎右衛門と妻、藤間善五郎と妻の名が連ねて刻んである。

冒頭の「観音霊場巡拝塔」の文字は藤間善五郎(柳庵)の筆ではないかと、『郷土ちがさき・一二六号』に藤間雄蔵氏の談が載っているが、救世

地藏尊の文字も柳庵の筆になるのかもしれない。小川七郎右衛門を先に書いて、善五郎がその後になっているのは善五郎の心配りによるものではないかと思われるからである。

「救世」は仏教の言葉で、世の人々を苦しみの中から救うこと。またその菩薩のことで、「観自在菩薩」のことである。一般的には観音菩薩とか観音様と呼ばれ、別名「救世観音」ともいう。

その三。「観音霊場巡拝塔」と「救世地藏尊」には馬入邨(村)の石工の名が刻んであり、相模川を挟んだ馬入村との交流の一端を記した記録である。しかし、四半世紀前に建てられた柳島八幡宮の旧鳥居、文政五年(一八二二)には今宿村の石工の名が刻んである。今宿村の石工になががあつたのだろうか。

その四。小川七郎右衛門と藤間善五郎が同時に出てくる古文書がある。天保九年(一八三八)『代々神沢講致法議定連名符帳』(藤沢市史第二巻、資料編・生活と風俗)である。『代々神沢講』は伊勢神宮参拝を目的に費用を積立てる講で、年三分ずつ六カ年間行うもの。藤沢、茅ヶ崎を中心に鎌倉・戸塚の一部にわたる講である。設立時およそ百二十名が出資者に名を連ね、講元に羽鳥村の大三贅・三贅八郎右衛門、柳島村の藤間善五郎、鎌倉・戸塚地区か

ら俣野村石川重兵衛の三名。講世話人が九名で柳島村小河(ママ)七郎右衛門が選ばれている。講は五組の御連中で構成され、一番組二十名の世話人が柳島村小河(ママ)七郎右衛門である。

『代々神沢講』の積金を充てた伊勢参拝は天保十四年(一八四三)に実施された。それを裏付ける資料が、萩園村の青木長右衛門がのこした『伊勢太々講道中記』である。この日記は現在藤沢市が所蔵している。日記の書出しに「天保十四年卯年正月十六日出立、馬入川にて不残落合候。然所、巳の刻の中刻時分東海道筋の人へ水の押来る如く一押に成て、馬入川御馳走舟二乗て侍る」と書き、日記の形を「参詣候間路々独り慰に吐出候間善悪不拘相記置申候」と旅程の折々に詠んだ短歌や俳句で日記を構成している。

伊勢参拝はなぜか当初の計画を一年繰上げて実施された。総勢五組七十名と僕(しも)廻りが二十三人。一番組は柳島村、萩園村など十四名で、青木長右衛門や藤間善五郎、小川七郎右衛門の名がある。

日記の主、青木長右衛門は伊勢参拝を済ませた後、高野山に詣で四国霊場を少しまわり、伊賀・大和・紀伊・淡路・阿波・讃岐・備前・備

中・備後・播磨・河内・摂津・山城・近江・美濃・信濃・上野・武蔵の寺社、名所、旧跡を巡って、およそ七十五日後に帰宅している。(この道中記の一部は『茅ヶ崎市史史料集・第四集』和田篤太郎日記「附・我身一代夢懺悔(青木長右衛門嘉房筆)」に掲載されている)

小川七郎右衛門が天保十四年(一八四三)に伊勢を参拝し弘化三年(一八四六)に「観音霊場巡拝塔」を建立する。その間約三カ年。その三カ年の間に坂東・西国・秩父百番観世音霊場巡拝を成就させている。回国や巡拝を職業にしている者に頼むこともあつたようだが「観音霊場巡拝塔」の「満主」は小川七郎右衛門本人のようである。

距離や日数はおよそのものだが西国三十三カ所、一千 km。坂東三十三カ所、千三百 km。秩父三十四カ所、千二百 km。全行程休まずに巡拝して七十〜七五日。平均的な体力の持ち主では一カ年一霊場を巡拝するのが順当なペースと思われる。

小川七郎右衛門と藤間善五郎の二人が同じ古文書や地藏像の銘に出てくるので、年齢がほぼ近いと仮定して、藤間善五郎の生年から推定すると四十台半ばの働き盛りということになる。農閑期を選んで巡礼したのだろうか。

「満主」とは何を意味するのか。定評ある辞典類にも載っていない。パソコンで検索しても出てこない。意味するところは文字が持つ意味のまま「満たした主」なので、伊勢参拝をはじめ百番観音霊場巡拝など諸国拝行の満願成就主ということになる。であれば「奉獻百番觀世音菩薩」が正面。右に建立年や建立者の銘。左に「天下泰平国土安全」となるのではなからうか。現在は「天下泰平国土安全」の面が道路に向いている。

付けたり 柳島には藤間善五郎(柳庵)の筆になる石造物があることは先に述べてあるが、文政五年建立八幡宮旧鳥居の柱には「發進」と彫つてある。「發」字の「はつがしら」のくずし方が独特で、くずし字辞典に事例のなくくずし方をしてている。読めない字であったが、「發」字の弓と爿のくずし方から類推して「發進」と読んでみた。「郷土ちがさき・一一六号」でも、拓本練習の際「發進」と読んでいる。「ほつしん」と読ませ「發心」に掛けたものなのだろうか。

「満主」も文字の意味を生かした熟語である。「おうめ地蔵」は柳庵の筆になる確証はないのだが、地獄に堕ちない願文を掲げ、「救世」と大きく彫らせたのも、「かながわの百人」に選ばれた文化人らしく、文字と言葉を巧みに組み合わせる表現したものなのだろう。

## 厄神の石塔と厄神講

宗建

市内には、厄神の石碑が二基あります。一つは、下町屋の神明神社境内にある、高さ百七十七センチメートルで唐破風をのせた立派なものです。



下町屋の厄神塔

正面に「厄神大権現」、左側面に「天下泰平国土安穩」と記され、嘉永二年(一八四九)正月に、世話人五人と二十三人の信者によつて建立されたとあります。

もう一つは、松尾の神明神社境内にあります。明治二十二年(一八八九)に建立され、「濱川神社 厄神大神」の文字と、世話人二人の名が記されています。



松尾の厄神塔

厄神信仰は、江戸時代の天保年間(一八三〇〜一八四四年)に、江戸に住んでいたと思われる修験者の善が始めたもので、東京都品川区にある浜川神社を本部としています。

市内にはこの厄神を祀る講中(こうじゅう)がありました。「あしかび郷土史研究グループ」の皆さんが、萩園で行われていた講の様子を聞き書きされたものがありますので、ここに再録します。お話下さったのは野崎夕子(たね)さん(明治十九年生まれ、昭和五十二年の聞き取り時に九十三歳)、そのお子さんの薫さん(明治三十五年生まれ、同じく七十七歳です。『としよりの話』(平成十二年あしかび郷土史研究グループ刊)から、必要と思われるところを引用します。

浜川講(厄神講)

浜川神社というのが東京にあるんだね、厄神様といつてね。厄除けの神様なんです。昔、今でいう伝染病が流行したという。はやり病のとき

に、厄除けを願って、厄神を信仰したらしい。うちの方では今でもずうつと続いているけど、それも各町内毎にあったと思うけどね。茅ヶ崎では、松尾、町屋、鳥井戸、南湖、柳島にもあったね。

年三回、正月、五月、九月の二十三日に、「厄神大神」と書いてある掛軸を持って、講中の家を一軒ずつ一回りする。

年に一回、二月二十三日が浜川神社のお祭り、役員がお賽銭を集めて代参に行き、神札を貰って帰る。お札を配りながら、各戸を回って歩く。「厄神大神」の掛軸をかけて、唱えごとをしました。

浜川神社は、(略)ずいぶん信仰している人が多いんですよ、昔は立派なお宮で、戦争で焼けてしまったので今はやりませんが、戦争前はおこもりをしたんですよ。「坊入」といって、おこもりをすることと一飯をいただくことを言うんだね。ご馳走を出してくれて、こちらはたくさんお賽銭は納めませんが、行けばお膳が出てお酒を出してね。あれは大変ですよ。気の毒なほどね。お供え物に、お札とお洗米を講中の人数だけくださる。榊の葉も一葉ずつくれます。お茶にいられて、皆で飲むと厄除けになる。

房州からは、(略)代参ではなく講員が大ぜい来ています。漁がたくさんとれるようにといつて

ね。漁師の神様ですね。昔は浜川神社のそばまで海だったんです。むこうぢ(向こう地 房州のこと)からは、船で来るんです。浜川さんの講社は浜辺の方が多いだよ。

以前は、別に代参しないで、毎月二十三日にお日待ちだけをやるお日待講が町内毎に五七軒位、夜集まつてやつていた。戦争ころか、物資不足になったころやめたんじゃないかな、それきり立ち消えになって今はやつていないが、町内毎にたくさんあった。浜川さんのお日待ちといつていた。

## 茅ヶ崎の八大龍王

源 邦章

時により過ぐれば民の嘆きなり

八大龍王雨止めたまえ

源 実朝作

右記の歌のように「八大龍王」は、鎌倉時代の將軍、源 実朝の和歌に登場していますが、元々はほとけの教えを守る八体の龍神。古代インドの神がルーツなので天部に属します。龍神は、海・川・湖などに住み、雨と水を司る神として大切に祭られました。神仏習合により神道と交わ

り、海神として知られ、各地に神社や石碑があります。

全国各地の神社、石碑を掲げると以下のようにあります。

### ① 神社の仏像・仏画

仏像：大阪府貝塚市孝恩寺、京都市三十三

間堂、奈良県吉野郡天川村龍泉寺

仏画：奈良県高市郡明日香村岡寺、同県桜

井市長谷寺

### ② 八大龍王神社

神社：埼玉県秩父市中町の今宮神社(八大

龍王宮)、宮崎県西臼杵郡高千穂町

岩戸の八大龍王水神社、奈良県葛城

山頂付近の八大龍王神社

茅ヶ崎市内には八大龍王の石碑や石祠が九基あり、それに柳島善福寺の仏像、中海岸にある神社を加えると次の十一か所になります。

① 寺社の仏像・仏画：柳島の善福寺の八大龍王像。

② 八大龍王神社：中海岸。神輿が浜降祭に参加します。

県内市町の教育委員会に八大龍王を問い合  
わせてみました。

- 八大龍王碑 七基
- ③ 浜須賀の海岸(元治元年)
- ④ 小和田の熊野神社境内(明治二十二年)
- ⑤ 海岸の海岸(明治二十九年)
- ⑥ 南湖ちがさき丸中庭(大正五年)
- ⑦ 南湖の住吉神社境内(慶応年間)
- ⑧ 柳島の厳島神社境内(明治三十四年)
- ⑨ 小和田本行寺墓地(昭和五十一年)
- 八大龍王石祠 二基
- ⑩ 柳島の海岸(明治卅四年)
- ⑪ 南湖の住吉神社境内(年銘無し)



柳島海岸の石祠



浜須賀の海岸の碑

茅ヶ崎の神社彫刻 その5



南湖住吉神社境内の碑(左)と石祠(右)

藤沢市…石祠が一所、竜宮社が一所。  
 平塚市…八大龍王の祠と竜宮社の二か所。  
 大磯町…大磯漁港に町内数か所の八大龍王  
 が合祀されています。  
 海老名市…八大龍王の祠と水神の碑が一か  
 所ずつあります。  
 以上のように県内他市町に比べ、茅ヶ崎市では  
 抜きんで八大龍王についての足跡が多いことが  
 分かりました。

### 神功皇后の新羅侵攻

平野 文明

今回もクイズから始まります。

「茅ヶ崎市内に八幡さまはいくつあるでしょう  
 か。分かった人は手を挙げ…。」

「ハイ！ 八万あります。」

ズコッ (質問者がずっこけた音)

実は、甘沼に「八幡大神」、浜之郷に「鶴嶺八  
 幡社」、平太夫新田に「八幡宮」、柳島に「八幡  
 宮」の四社があるのです(神社名は神奈川県宗  
 教法人名簿に依りました)。このうち、平太夫  
 新田を除く三社の拝殿の向拝(こうはい)に彫刻  
 がありますので、今回はこれを取り上げます。  
 三社の彫刻のスケ  
 ツチを見て下さい  
 三つとも似ていま  
 す。一番シンプル  
 なのは柳島の八幡  
 宮のものです。手  
 に軍配を持ち、岩  
 に腰掛けた武人  
 と、片膝を立てて  
 布にくるまれた赤  
 ちゃんを抱いてい



柳島 八幡宮

る男性が表現されています。二人のたたずまいから、武人の方が上役で、男性はその部下のように見えます。



そこでクイズ。この二人はだれでしょうか？

また、へんな答えが来ないうちに明かしましょう。武人は神功皇后(じんぐうこうごう)、男性は武内宿禰(たけしうちのすくね)です。

鶴嶺八幡社の神功皇后は弓を持った立ち姿ですが、

三社ともこの二人が彫刻のメインとなっています。では、この場面はどんな物語が元になっているか、と言いますと…。

神功皇后は第十四代仲哀天皇(ちゆうあいてんのう)の皇后です。日本書紀に書かれている物語を紹介します。天皇と皇后は熊襲(くまそ)を打つために九州におられました。あるとき神が皇后に乗り移って、「海の方こうに金銀財宝の

あふれる新羅(しらぎ)という国がある。自分を篤く祭れば、刀を使わずともその新羅を従えることができるだろう。」と天皇に伝えました。天皇は高い山に登って、海のかなたにそのような国があるかを見渡しましたが、海原が広がっているばかりでした。

そこで天皇は、神のお告げを疑い無視しました。ところが再び、神が皇后に乗り移り「私をなぜに疑う。それならば新羅国を得ることはできません。ただし、皇后は今懐妊された。その子はその国を得ることになるだろう。」と伝えました。程なくして天皇は病み、息を引き取りました。



神を信じなかったためだと書かれています。神功皇后と大臣の武内宿禰は、国が乱れることを案じて天皇の死を公表せず、亡きがらを密かに穴門(あなと)に埋め、現在の山口県下関市の当たりと考えられています(す)に移し、葬儀を行いました。

その後、皇后は神のお告げに靈験のあることを知り、「海を渡って宝の国を攻めようと思う。成功の可能性があれば、自分の髪が二つに分かれるだろう。」と頭



を海水に浸したところ、きれいに別れたので、そのままみずらという男子の髪型に結び上げました。男装し、武装が整ったのです。戦の準備を進める中で、出産の予定日が来てしまいました。皇后は、「戦が終わって、帰って来てからお産ができませんように」と神に祈り、石を腰に巻き付けました。

皇后の軍船の集団は神の加護のもと、魚の大群の助けと大風に乗って新羅国の奥深くに到着しました。新羅国の国王たちは驚いて戦うこともなく平伏しました。高麗(こま)と百済(くだら)の二つの国もそれにならい、三国とも

以後、朝貢を絶やさないと約束したので、皇后は無事に筑紫(九州)に帰り着くことができ、



浜之郷 鶴嶺八幡社

「うみ」という所で男子を出産しました。後の第十五代、応神天皇(おうじんてんのう)です。「うみ」は福岡市の東側に隣接する宇美町とされています。この物語は、終戦前にはたいへん人気のある神話だったそうです。歴史の

上では仲哀天皇も神功皇后も武内宿禰も実在したとは証明されておりません。しかし、応神天皇は実在性が高いと考えられています。また、この神話は、朝鮮半島に影響を与えていた四世紀の大和朝廷の歴史を踏まえているとも考えられています。

再び三社の彫刻を見てください。彫刻は神話を元にしていますが、忠実に表現しているものはありません。ここで一番の違いは、武内宿禰(たけしうちのすくね)の表現です。神話では、

宿禰は半島侵攻にも出産の場にも書かれていないのです。宿禰は古事記・日本書紀の他の場面にも登場し、やはり終戦前にはたいへん人気があったそうです。男



浜之郷 鶴嶺八幡社

装し武装した皇后と生まれたばかりの応神天皇、またそのみどり児の天皇を抱く宿禰という三人揃いの絵柄は、当時の人々にひろく迎え入れられたようです。

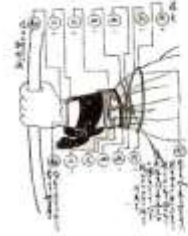
甘沼の八幡大神の彫刻は、柳島の絵柄に朝廷軍の兵隊二人を加えてあります。浜之郷の鶴嶺八幡社ではそれがさらに複雑になって、兵隊は六人に増えています。さらに、向かって左端

に描かれているものは、うまくスケッチできていないこともあって何だか分りにくいかも知れませんが、これは征服された三韓側の人物三人が、大陸風の衣裳を着て、両手を掲げて恭順の意を表しているところです。立ち姿の皇后は右手を掲げて遠くからそれを望んでいます。

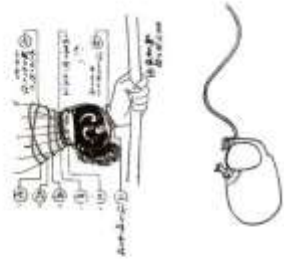
ここで、今回三番目のクイズです。皇后が左手に持つ弓の上部に、チョット見では何だか分からないものをぶら下げていますが、これは何でしょう？

さあ、この問いはむずかしい。すでに答えがある訳ではないのですが、私はこ

鞆 (とも)



429



『国史大辞典』10巻より

れは、弓を引くとき用いた鞆(とも)。日本書紀に鞆を古くは「ほむた」と言ったとあります(と見ます。同書の応神天皇の条に、天皇が生まれたとき、腕の一部が瘡(こぶ)のよう

に盛り上がっていて、それは「ほむた」(つまり輓)の様だったとあります。応神天皇は、ほむたわけのみこと(誉田別尊)、おおももわけのみこと(大輓和気命)、ほむた・ほんだのすめらみこと(誉田天皇)とも呼ばれています。また、戦の神として知られ、ネット情報によりますと弓矢の神だそうです。彫刻師がこの輓(ほむた)ともを強調して、母親である神功皇后の持つ弓に意図して吊したものと考えられるのです。この彫刻は大変に配慮が細かいのです。

八幡宮になぜこの三人が登場する彫刻があるのかといえますと、祭神である八幡神は応神天皇とされているからです。茅ヶ崎でも『市史3考古・民俗編』によりますと、四社とも誉田別命を祭神としています。神社向拝の彫刻の絵柄は祭神に係るものが多いとは、このシリーズの先の号にも書いたことでした。

(付録)本誌前号(十七号)で、神話の天の磐戸(あまのいわど)開きの場面にサルタヒコノカミは登場しないのに、円蔵の神明大神にある、いわど開きの向拝彫刻に現れているのはなぜでしょうと書きました。この答え。

神話のいわど開きにはアメノウズメが重要な役を演じます。古事記・日本書紀にはそうは書い

てないのですが、世間ではサルタヒコとアメノウズメとは夫婦であると解釈されていることから、彫刻に二人をそろえて登場させたものと考えられるのです。神功皇后の新羅侵攻の彫刻に武内宿禰を登場させたのと同じような配慮がなされているのです。

(平成二十六年八月二十二日)

お知らせ

### 文化資料館の秋の催し

第5回 ちがさきの石仏と社寺探訪

茅ヶ崎地区の本村付近を探訪します。

○ガイダンス：十月二十三日(木) 十時から

文化資料館にて。

○現地探訪：十月三十日(木)

集合場所、時間などは参加申し込み

の方に追ってお知らせします。午前中

で終わる予定です。

○定員：三十人(九月十七日以降に電話で文化資料館に申し込んで下さい。)

### 古い墓石に思う

金子 栄司

過日、ふとしたきっかけから、承応の年号(一六五二〜五五)を刻んだ墓石を見かけた。近世初期といえる古い年号を刻んだ墓が、なぜこの場所にと気になっている。

墓石の建立年と墓主の没年は必ずしも一致するものではないが、墓石の刻年について、墓石研究者の記述に「建立年の刻記が始まるのは江戸時代末期になってからであり、ほとんどが没年によっている」とあり、命日を刻んだとみてよいようである。

墓石の時代的変遷を『石仏の民俗』(土井卓治著 一九七二年初版 岩崎美術社)から、極めて独善的に要約すると、板碑型では尖頂部が次第に丸味をもつてきて、櫛型といわれる円弧になったものが現れる。これが享保(一七一六〜三六)〜延享(一七四四〜四八)頃で、この円弧が次第に低くなつて、塔身が厚みをもつようになり、やがて断面が正四角形の角柱型に近くなる。

これらの形態の変遷は形態と時代がどの地域においても同じであるとはいえないのだが、変化の 패턴の説明としては納得できる。当該墓石



は、頂部を三角に尖らせ、背面を粗く成形した板碑型といわれる形をしているので、墓石の刻年と墓石の形態は符号しているといえるのではないだろうか。

領主や知行主あるいは名主などの墓石は茅ヶ崎市内でも見ることが出来る。江戸時代以前の僧侶の墓や天正銘(一五七三〜九二二)の名主の墓はよく知られているが、一般的な庶民の墓石はいつごろから造られるようになったのだろうか。

江戸時代初期の幕府の宗教政策の中から発生した檀家制度によつて寺院の檀家となることを義務付けられ、幕法によつて、檀家の義務が明示された。元禄時代半ば(一七〇〇)頃になると寺院側から檀家にたいしてその責務を説いて、故人の月命日・祥月命日などの日頃の参拝、春秋の彼岸の墓参り、年忌法要等々がおこなわれた。そして先祖供養の墓石も建てられるようになったようだ。はじめは個人や夫婦の為のものが、明治中期以降、家制度の確立により、いままで個人の戒名(法名)を彫っていたものが「\*家之墓」「\*家先祖代々之墓」などのように、家の墓に変わっていく。

茅ヶ崎市内の一般庶民の墓について記録されたものはあるのだろうか。参考に「常願寺(茅ヶ

崎市萩園)古墓石等調査記録「平野文明」文化資料館調査研究報告「二三」から古い墓石を見てみると、

(刻年銘) (数)

一六九九 一一基

(寛文四・一六六四年、延宝三・一六七五年など)

一七五九 一二基

一八一九 一二基

一八七九 一二基

一八八〇 四基

この調査対象の中に最古墓石が含まれているというわけではないが、時代を経て係累が絶えてしまう程古い墓石の例として提示してみた。

さて、承応銘墓石に話を戻そう。前述の一般的な墓石の出現時期や常願寺古墓石に出てくる建立年にたいして承応年号の墓石は十年ほど古い。承応銘墓石は相模川に近い東海道の北側に位置する。この辺り、関東大地震で土地が隆起する以前の地図では、もつと東寄りに流れていた河道の名残や氾濫跡などが広がり、農業を営むには過酷な地で『新編相模国風土記稿』によれば「相模川に傍たれば毎秋泛濫の患に堪えず。崩入せし田地も若干なり」と云。民家五十。相模川の岸に流作場(りゆうさくば)ながれさくば。

湖沼や河川の沿岸にあり、水が一面にかかっているような場所。水が多い年には作付け収穫が難しく、むしろ、干ばつの年のほうが収穫量が多いような土地)及び芝地あり」と記された土地である。

であるにもかかわらずここに、承応年代以前から村人の営みの証が遺されている。

茅ヶ崎市文化資料館では、市内墓石の調査の必要性は認めているが、具体化されていない。個人情報の問題。個人墓地への立ち入りと調査への理解と協力など、大変難しいと考えられるが、古い墓石の存在と分布を調べることによつて、過去帳とは異なつた村々における一般の人々の営みを探る、手掛かりの一端にならないだろうか、と考えている。

図書紹介

『地名が語る赤羽根のむかし』

茅ヶ崎市文化資料館編 茅ヶ崎市教育委員会 二〇一四年刊行

「資料館叢書 12」として刊行された本書は、「茅ヶ崎 地名を調べる会」が一九八八年に発足した後、しっかりした基礎作りをし、丹念な調

査を行い、さらに編集に際して慎重な検討を重ねた上で、本年に刊行された。書名が示す通り、地名そのものに関連する伝説や言い伝え、あるいは、地理・地形的説明にとどまらず、集落、耕作地、山林、社寺、石造物、公共的建物など多様な対象についての記録が収められている。単なる地名の由来などではなく、消滅しつつある地名の調査を通じて、赤羽根のむかしから現代までの急激な変化に耐えて伝えられてきた暮らし方の重要な部分について、次の世代へ手渡すべき贈り物として作成されたものである。市民活動のたいへんに優れた成果なのである。

恥ずかしながら私はこれまで赤羽根地区のほとんどを実際に歩いたことがなく、西端の小出県道付近と、東部の赤羽根通り沿いを多少見ていただけであった。市史関連の文献や石仏調査の資料などを読んで、地図上で地区内のあちこちを訪ねてはいた。ところが、地図や文献だけでなく、赤羽根を知っている者(私もその一人だ)には、本書を読むことで、そこで解説されている道筋を実際に辿りながら地理と歴史が織りなす光景を確かめたいという探究心がかきたてられる。すでに住まっている人が読んでも、ふだんの生活で何気なく使っている地名の背後に潜む地域の歴史に気付かされ、もっと深く知りたいという

意欲が高まるに違いない。そのような力を潜めた調査・執筆者の意欲的な記述が、どの頁にも見出されるからである。市民団体などによるガイド付きの探訪の機会があればぜひ参加されるとういだろう。

なお、現在の赤羽根は一図(十五図)までの字からなるが、これは明治九年の地租改正作業により地番割り付けのための区分名であったものが字名になったものらしい。それ以前にはもともと範囲の狭い、境もあいまいだが、本来の地形や集落の様子を表す多数の旧字名があったのであり、本書にはそれらが記録されている。現在では「図」という区分自体が歴史的記憶の一部を成していることになる。十二(十三頁)の全図により、「赤羽根のむかし」を伝える重要な地名が一目で見渡せるようになってるのが本書の特色の一つである。ただ、取り外し可能な地図であったら本文と対照させやすかったのにと思われた。さて、ここは本書を紹介するのが目的であって、書評の場ではなく、関心の赴くままに感想を述べる場でもない。以下には、「第二章 下赤羽根の地名」を読みながら気付いた二、三の事項について記しておく。

「下赤羽根」の字は一(三図)で、江戸期の赤羽根郷下村に相当する。本章は、下赤羽根附近の

地名図、第一節薬師堂跡附近、第二節山下付近、第三節下赤羽根自治会館付近、第四節地藏山付近、第五節神明大神附近という六つの部分で構成される。最初の地名図(二十七頁)は全図と比べて地名番号が若干欠けていたが、正誤表で補正されていた。それでも、補正部分の表記に不十分な箇所があった。現在の公的施設の表記(例えば、下赤羽根自治会館)はたいへん便利だが、番号と異なり場所がとらえにくくなっている。もちろん、本文中の記述と併せてネット上の地図を利用すれば、正確な場所を把握でき、何よりも現地に行ってみるべきだと承知はしている。

三十五頁上段で廃寺の満蔵寺という文言が出てくるが、この旧満蔵寺のことは途中の二箇所で見及があり、詳しくは六十五頁で扱われている。できれば(五節参照)、(六十五頁)などと参照先が示されていれればずっと読みやすくなるのではと思われる。しかし、これらは、たいへんな編集作業を考えれば「無い物ねだり」に近いのである。本書の価値を下げる事柄ではない。

上に紹介した各節を見れば分かるとおり、信仰にかかわる各地区の大切な社寺や石造物、近世以降の暮らしで中心的な大きな役割を担ってきたいわば公的な建物、あるいは、道路や集

落が的確に選ばれ、その付近を地理的にも歴史的に全体的に扱おうとする意図が明瞭になっている。「第五節神明大神附近」では棟札の説明が予想以上に詳しく紹介されており、江戸期の信仰、村政、時代の変化の中での赤羽根を読み取つてもらおうとする工夫がなされているのである。全体に写真や図が多くわかりやすい、所々に挿入されるコラムと史料から近現代の変化の一端を窺うこともできる。

他の章に触れる余裕はないが、私は本書をとっても楽しく読み、詳しい地図で確かめながら赤羽根中を訪ね回った気分になることができた。ここで改めて調査・執筆・編集に携わった皆さんに感謝の気持ちを申し上げたい。こうした報告書にしては、巻末の参考文献もきちんと挙げられている。民俗誌に関心がある者から見ると、その中に赤羽根を取り上げた文献はなく、その意味でも本書は、地域の民俗誌的なことを知るための最初の手掛かりとも位置づけられよう。この後に続く市民のグループができ、赤羽根の暮らしをさらに総合的に調べる活動が行われることを強く期待したい。本書は茅ヶ崎市文化資料館あるいは市役所社会教育課において、これだけの内容を三〇〇円で購入できるので、ぜひお読みいただきたい。

(小川正恭)

## 行事報告

### 夏休みワークショップ

#### 「古民家で親子で布ぞうり作り」

七月三十一日(木)、民俗資料館(旧和田家)を会場にして布ぞうり作りを催しました。事前に申し込みのあった親子五組が参加しました。

この行事は文化資料館が毎年夏休み期間中に開催している、小学生向けのワークショップイベントの一つです。

当日は、普段は入ることのできない古民家の屋内に上がって作業しました。もちろんエアコンなどの冷房器具はありませんが、古民家の屋内は日差しが遮られ、風通しも良く、ほどよい夏の暑さを感じながらの作業となりました。

布ぞうりは、使い古しのシャツやシャツなどの布地を再利用して作り、室内履きとして利用できます。履いて歩くとフローリングの汚れも拭き取ってくれる優れものでもあります。まず、布地を幅約5cm、長さ約70cmの細長い形状に切り分け、それを芯地となるビニールロープに編み込んで作ります。参加者の親子は皆それぞれ持ち寄った布地で、思い思いの色の組み合わせの布ぞうりを作り上げていきました。

午前中には、ほとんどの参加者の片足分が出

来上がったようです。十二時を過ぎたところで作業を一旦中止し、昼食の時間となりました。昼食は、縁側に座りお弁当を広げ、心地よい風を受けながらの食事となりました。

しかし、熱心な参加者の皆さんは、お昼休みもほどほどに作業を再開していました。午後になると、慣れた手つきとなり、もう片足分もすぐに出来上がりました。

一足分そろったところで、今度は鼻緒の用意をします。鼻緒も使い古しの布で作ります。試し履きをして、自分の足の大きさに合わせて鼻緒を挿(す)げます。

これで布ぞうりの完成です。出来上がると、皆一様に喜び、布ぞうりを履いての写真撮影会となりました。出来上がりに満足そうな子供たちの様子が印象的でした。

民俗資料館(旧和田家)は、江戸時代の萩園村で村役人をつとめた和田家の母屋を移築したものです。棟札により安政二年(一八五五)に建てられたものだとわかりました。昭和五十七年(一九八二)に堤にある現在地に移築復元されました。この旧和田家は幕末の大型民家の特徴を備えている点などから、茅ヶ崎市重要文化財に指定されています。



(文化資料館 芦葉抄苗)

### 文化資料館移転整備事業について

文化資料館は昭和46年7月に開館しました。その当時、地域開発の進展や生活様式の変化などにより、文化財や郷土資料の保護・保存の必要性が叫ばれており、その様な中で郷土の歴史を伝える資料を永久に保存するために建設され開館しました。

以来、市民の皆様のご協力を頂きながら様々な社会教育活動を展開してきました。しかしながら、施設の老朽化等の課題や、地

域の歴史や文化財の総合的な拠点づくりが必要とされていることから、平成31年度からの開館を目指し、現在の中海岸から堤地区に移転し、整備することとなりました。

市教育委員会として、これまでの活動を継承しつつ更なる発展を図り、郷土の歴史・文化・自然に関する学びの場として多くの方に活用して頂けるよう、市民の皆さまからのご意見や、有識者からのご意見などを踏まえて、整備事業を進めたいと考えています。

#### ○主な整備の流れ

- ・平成26～27年 整備基本計画の策定
- ・平成28年 実施設計(予定)
- ・平成29～30年 工事(予定)
- ・平成31年 開館(予定)



(文化資料館 須藤 格)

#### ＜編集後記＞

前号十七号は平成二十四年三月刊行でしたので、二年半ぶりの刊行となります。前号に

は「刊行終了のお知らせ」として、もつと幅広い内容のものにして再出発すると書きましたが、変更することがなかなか難しく、また、市民の皆様からは、続号を望むご意見も頂き、前号を継いでこの十八号を編集しました。

そのような訳で、この号も石仏関係の文章が多いのですが、今年の二月に発行した『地名が語る赤羽根のむかし』を紹介したことが新味です。この本の紹介者も書いておられますが、良い本ですので、皆さんぜひ手にとってご覧下さい。

今回も民俗行事部会の会員から原稿をいただきました。ありがとうございました。今後は、文化資料館主催の催し物にご参加の皆さんのご意見や感想、文章なども載せることができたいなあと思っています。

(資料館 編集子)

※ご不明の点等は1頁に記載の連絡先にお申し越しください。なお、本誌バックナンバーは茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。

( <http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html> )